令和 4 年度　環境科学院　修士論文要旨

日中オンライン国際交流プログラムの開発
ー「つながる場 in Japan&China」の実践と参加者評価をもとにー

北海道大学大学院　環境科学院
環境起学専攻　実践環境科学コース
曹 潔

国際交流は、国と国との間で行われるさまざまな活動、すなわち人々による国境を越えた交流のことである(日比野 2009)。多くの国際交流プログラムでは(例: 村田ら 2016)、国の名物、習慣や歴史を紹介し、現地での食事など体験できるものの、互いの日常的な興味・関心について話し合うことはまず見られない。オンライン国際交流も、コロナ禍で、リアルな国際交流の代替手段として実施されているが、時間や費用の制約、健康面や治安面の不安などを解消できるメリットがある一方、画面越しの交流だけ感情交流や関係性構築が難しいという限界もある(植田 2016, 関ら 2021)。

本研究は、リアルな国際交流の代替手段ではない、オンライン国際交流の可能性を追求すること、および、実証することを目的とする。すなわち、現在の国際交流の課題である(1)互いの日常生活や日常的な興味・関心に触れない堅苦しく交流になっていること、(2)感情交流や関係性構築の難しさ、などを克服したオンライン上の継続的・日常的な交流を試行する。

著者は、日本と中国を結んだオンライン国際交流として、昨年度の施行を経て、日中併せて 75 人(研究室所属 5 人を含む)が参加した、オンライン交流会 4 回、参加者が作成した動画 70 本、WeChat グループでの日常的な交流、などから構成される「つながる場 in Japan & China」を実施してきた。著者は、それらを運営メンバーとして参与観察したほか、4 回のアンケートや、7 名の参加者に対する半構造化インタビュー、高校生 10 名に対する、グループインタビューを実施した。

参与観察、アンケートやインタビューから、以下のことが分かった。①参加者は事前に動画テーマに対する自分の考えや、相手が理解しやすいような表現を考えたり、積極的に字幕を作ったり、発音を調べたり、検討・修正したりする動画作成の過程、また、オンライン交流会での少人数の話合いに参加することなどが語学学習の動機付けとなっていること。②WeChat グループ内の日常交流、動画作成・視聴、定期的なオンライン交流会が組み合わされた継続的・日常的な交流形式は、参加者同士の心理的距離を近づけ、信頼関係を築くことに貢献したこと。特に、交流会の後、個人的なビデオ通話したり、日常生活をシェアしたりする参加者もいるようになった。③交流テーマは、主催者ではなく、参加者が決めている。交流内容は国の名物、風習より日常生活などの共通の関心事が多く、参加者にとってはカジュアルなプラットフォームになっていること。④学生、教員や社会人などの多様な属性の参加者との交流経験によって、異なる立場の人の考えを理解し、より深く交流することができている。参加者は、このようなことができる本プログラムを高く評価したことである。

「つながる場 in Japan & China」は、リアルな国際交流の代替手段という限定的役割を超えて、学習意欲の向上、日常生活や現地文化の相互理解、人間関係の構築や感情交流などの可能性が実証された。新型コロナウイルスが常態化しつつある、今後、国境を越えた交流が徐々に再開されると思われるが、本プログラムがリアルな国際交流と結びつけば、より良い効果が期待できるだろう。